

涅槃經に現はれた阿闍世王

松 永 大 覺

—

阿闍世王の逆惡、即ち父頻婆娑羅王を殺害し母韋提希夫人を座敷牢に幽閉したことは前號「韋提希夫人について」に於いて、觀無量壽經を所依として論述したが、其の後の經緯は涅槃經（梵行品）と云ふ經典に阿闍世王を登場させて美しく描寫されてゐるのである。阿闍世王は釋尊教團に叛逆した提婆達多と結托して教團を迫害し釋尊の外護者である父頻婆娑羅王を殺害し母韋提希夫人を七重の座敷牢に幽閉したのである。

想ふに釋尊一代の間に於て最も心痛せられた人事件はこの王舎城の大悲劇であつたのである、この悲概の原因は前號に述べた如く提婆達多が阿闍世王をそゝのかしてこの慘劇を行はしめたのである、提婆のこの惡毒が四方八方に擴がつてゆくのである。而して最後に阿闍世王が苦しみ悶え大地に倒れて苦しむのである、而るに釋尊の大慈悲はこの惡毒に向つて注がれ生命にまどひつき、一つになつて動くのである、所謂釋尊出世の本懷はこゝに實現せられるのである、この模様を涅槃經（梵行品）の原文を通して論述してゆこうと思ふ。

この涅槃經に於て阿闍世王の登場は梵行品第二十之四の初めに

「爾の時に王舎大城の阿闍世、其の性慳惡にして、喜んで殺戮を行じ、國の四邊を具す、貪志（貪欲、瞋恚、愚痴）其の心熾盛なり、唯現在を見て未來を見ず、純ら惡人を以て眷屬と爲す、現世の五欲に貧著するが故に父王辜無きに横に逆害を加ふ、父を害するによりて、おのれが心に悔熱を生じ身の諸瓔珞、伎樂を御せず、心悔熱の故に徧體瘡を生ず、其の瘡、臭穢附近すべからず、尋いで自ら念じて言はく我今此の身已に荏報を受く、地獄の果報將に近づきて遠からずと其の時に其の母韋提希后種々の藥を以て而かも爲にこれを塗る、其の瘡遂に増すれども降損あることなし、王即ち母に白さく斯くの如きの瘡は心よりして生ぜり、四大より起れるに非ず、もし衆生よく治することありと云はゞこの處あることなけん」と云ふ文字によつて始まつてゐる、この文字を見て凡ゆる人は比類なき極惡人を想像することであろう、阿闍世王は父の頻婆娑羅王を殺害し終ると狂惡な惡人ながら後悔を生じ煩悶するのである、この心の煩悶が肉體に現はれて身體中に瘡が出来てその瘡が臭氣を發散して近づきことが出来なかつたのである、阿闍世王は自ら「我れ今この身に荏報を受けてゐる、地獄の異報が近づいてゐる」と考え、今現に生きながら地獄へ墮ちこんでゐると、獨り苦しみ悶えるのである。この時韋提希夫人は涙と共に心から種々の藥を瘡に塗つて、看病するのであるが病氣はますます激しくなるばかりである。

阿闍世王は母に

涅槃經に現はれた阿闍世王

「母上この瘡は心の煩悶から生じたのであつて身體から出たのではない、それで決してこの病氣を治すものはこの世にありません」と

云つて苦悶し續けるのである。

時に日月稱と云ふ大臣が訪れて恭々しく立つて阿闍世王に申し上げるには

「大王は何故お顔の色がお悪いのですか、大變おやつれになつて居られます、お身體のお痛みかお心のお痛みでありますか」と、

阿闍世王は答えて

「私は身體も心も痛むのである、私は何の罪もない父王を無道にも逆殺をした、私は昔智者に聞いたことがある、この世に地獄を脱れないものが五人ある、それは五逆罪であると、私は既に數かぎりない罪を犯して居るどうして身心が痛まずに居られようか、私のこの身心の痛みを治してくれる良醫は無いのである」と、

そこで大臣は「大王あまり御心痛なさいますな」と云つて、

偈を説いて

「心配すればするほど心配は増すものである、喜んで眠ればよく眠れる様に酒も色も同じことである」と云つて更に言葉を續けて、

「大王は五人のものが地獄へ墮ちると云はれるが誰が地獄を見て來て話をしたものがありますか、地獄と云ふものは世の中の智者の作ったものである、世の中に大王の病氣を治す良醫がないと仰せられますが、現に富蘭那

と云ふ大醫が居ります。彼は一切を知見して自在を得て、清淨梵行を修めて常に無無無邊の衆生の爲に無上安穩の道を説いて居ります。其の教えは惡業と云ふものもなければ惡業の果報もない、善業もなければ善業の果報もない又上業及び下業もないと説いて居ります。今この人は王舍城のうちに居られます。大王よ駕を屈して彼の許に行つて教えを受け身心の御病氣を治療して下さる様お願い申し上げます」と。

時に阿闍世は

「本當に治してくれるなら私は心から歸依するであろう」と。

又藏徳と云ふ大臣が御見舞に來て

「大王よ何故にお顔の色が悪く唇が乾いてお聲も細り給ふのでありますか、お苦しみはお身體かお心の方でありますか」と。

阿闍世はこれに答えて

「私は今身心共にどうして痛まずにみられようぞ、私は盲目で智慧はない、多くの悪い友に近づいて提婆達多と云ふ惡人の言葉に従つて正法を信じて居られる父王を、無道にも逆害を加えたのである、私は昔智者が偈を説くのを聞いたことがあるが、それは、もし父母や佛及び佛弟子に對して不善の心を起し、悪い事をしたものは阿鼻地獄に墮ちると、この故に私の心は怖れ、苦惱して居るのだ、そうして私の病氣を治してくれる良醫はないのだ」と。

そこで大臣は

「大王よ御心配遊ばすな、法と云つても二種類あつて出家の法と王法とは異なるものであります。王法は父を害すれば即ち國王になれるのです。これは勿論逆さまのことであるが罪にならないのです。迦羅と云ふ虫は母の身體を破つて生れるのであるが、生れる法がそうであるから、母の身體を破つても實は罪はないのであります。駟驢は子を生むと死ぬがこれも自然の法であるから罪にはならないのであります。國を治める法も亦この通りであるから父、兄を殺すとも實は罪にはならないのであります。出家の法は厳しく蚊や蟻を殺しても罪になるが王法とは根本から違ふのであります。大王の云はれる如く世に身心を治す良醫はないと仰せられますが今現に末伽梨拘舍利子と云ふ大先生が居られます。彼は一切を知見して一切の衆生を赤子の如く憐愍して自らは一切の煩惱を離れて衆生の三毒の煩惱の毒矢を抜いて下さるのである。この師は今王舎大城に居られます。どうぞこの人の所へ行つて大王はこの師に遇えば一切の罪は消滅します」と。

阿闍世はこれに答えて

「明らかによく私の罪を除いてくれるならば私は心から歸依するであろう」と。

又實徳と云ふ大臣が王の所に來て偈を説いて云ふには

「大王何が故に瓔珞をぬぎさり、髪を亂して居られるが、心の苦痛ですか身體のお痛みですか」と。

阿闍世これに答えて

「私は今どうして身心共に苦痛を感じずにあられようか、私の父は慈愛深く、殊に憐みを垂れ給ふた方であつて少しも罪はないのである。私の父王は人相見の所へ行つて問はれた時に人相見は答えて云ふにはこの子が生れ

ると必ず父を殺害すると、父はこの予言を聞いたけれども尙私を可愛がつて下された。昔私は智者が、こうゆうことを語る事を聞いたことがある。それは母に通じたり比丘尼を汚したり、僧伽のものを盗んだり、無上菩提心を起した人を殺したり及び父を殺したりする者は阿鼻地獄に墮ちると云ふのである。私はどうして身心の苦痛を感ぜずにゐられようか」と。

大臣は更に

「大王心配することはありません、一切の衆生は皆過去の業を持つて居ります。過去の業があるからいろ／＼の生死を受くるのであつて、先王にも同じく過去の業縁であつたのでありますから、王には何の罪もないのであります。大王どうぞ心を大きく持つて心配してはなりません、心配すれば心配は増すもので、眠ればますます／＼眠たいものである、色も酒も同じことである、今那闍毘羅眩子と云ふ先生が居ります。この人の所へ行つて法を聞いて下さい」と。

又悉知義と云ふ大臣が王の所へ行つてかく申し上げた。

阿闍世はこれに答えて

「私は今どうして身心共に苦痛を感ぜずにゐられようか、父王には何の罪もないのに逆害を加えた、昔智者が父を殺せば數限りない長い間大苦惱を受けねばならないと云ふことを聞いたが、私は間もなく地獄へ墮ちねばならない。私の罪を治してくれる良醫はどこにもゐないのだ」と。

大臣即ち

「大王よどうぞ御心配をお捨て下さい、大王もお聞きの事と思いますが昔羅摩と云ふ王が父を殺して王位につき跋提大王、毘樓眞王、那睺沙王、迦帝迦王、毘舍佉王、月光明王、日光明王、愛王、持多人王、これ等の王は皆父を殺して王位にいたのでありますが、誰一人地獄に墮ちたものはありません。又現に毘瑠璃王、優陀耶王、惡性王、鼠王、蓮華王は皆父を殺したのでありますが、一人も大王の様に苦しんでゐる人はありません。地獄、餓鬼、天中等と云つて居りますが、誰も見たものはありません。大王よ有るものは人間と畜生だけであります。これも因と縁とで出來たものでもなければ又因と縁とで滅びゆくものでも有りません。もし因縁でなければ善でも惡でも有りません。どうぞ大王よ御心配してはなりません。心配すればする程心配は増すものであり、眠むればますます眠むたいもので、色も酒も同じことあります。今阿耆多舍欽婆羅と云ふ先生が居りますから彼の所へ行つて法を聞いて下さい」と。

又吉徳と云ふ大臣が來て云ふには

「地獄とは如何なる意味か私が説明しましょう。地は大地の地であつて獄は破ると云ふことである、地獄を破つて罪業の報いのないと云ふのが地獄の心である。又地は人、獄は天であつて父を殺して人天の樂を得ると云ふのが地獄の義である。それ故に婆蘇仙人は羊を殺して人夫の樂を得ると、又地は命、獄は長で壽命の長いのを殺すと云ふことである。大王この故に全く地獄は無いのである。大王よ麥を植えれば麥がとれ、稻を植えて米がとれる様に地獄を殺せば地獄を得、人を殺せば人に生れるのである。大王今私の云ふことを聞いて下さい。世には殺すと云ふことは無いのである、何故ならば有我と云ふても殺は無く、無我と云ふても殺は無いのである。もし

有我ならば我は變らぬ常住のものだから殺すと云ふことはないのである、壞されず、縛られず、瞞られず、喜ばれない。丁度虚空の様なのが我である。どうして殺害の罪と云ふものが成り立ちませうか、もし無我ならば一切の諸法は無常である。無常であるから念々に滅する、そうすれば誰に罪があるでせう。大王火が木を焼いても火には罪がありません。斧が樹を切つても鎌が草を刈つても罪はありません。又刀が人を殺しても刀は人でないから、罪がない様に人も亦罪がないのであります。毒藥が人を殺しても毒藥は人でないから罪がないのであつても亦罪はないのであります。一切の萬物皆これと同じ様に殺害と云ふことはないのであります。大王御心配を捨てなさい、今迦羅鳩駄旋延と云ふ先生が居りますから其の人の所へ行つて法をお聞き下さい」と。

又無所畏と云ふ大臣が來て前の大臣と同じ様に阿闍世王を慰めて尼乾陀若健子と云ふ先生の所へ行くことを勧めるのである。

これ等の多くの大臣達が阿闍世王に對して色々の慰めの言葉を與えるが、それは何の役にも立たない、人生問題の苦しみが大きくなればなるほど、この様な淺薄な月並の言葉では其の苦しみが解決出来るものではないのである、又これ等の大臣の勧めた思想も人間の魂の自覺と苦惱を衝いてゐない、これ等は皆一時的なものである。阿闍世の心痛はそんなことで目覺るなまやさしいものではない、而してこれ等の大臣の勧めた先生は六師外道と云つて釋尊在世の頃多くの弟子を以て人々を惑はしてゐたのである。六師外道の第一の富蘭那外道とは一切の諸法は其の性は空であつてその時／＼に斷滅すると主張するのである。即ち因果を否定して自己の責任を免れんとするのである。

第二の未伽梨拘舍離子外道は常見を主張するのであつて一切の苦樂は善惡の業の因縁によつて生ずるのではなくて自ら生ずるのだと云ふのである。

第三の刪闍耶毘羅胝子外道は人は皆前世の宿業によつて果報を得るのであつて人間の意志でどうすることも出来ないと云ふのである、所謂一種の宿命論である。

第四の阿耆多翅舍欽婆羅外道は善惡の因果を否定して自然生を主張するのである。

第五の迦羅鳩駄迦旃延外道は一切衆生を殺害しても一切衆生は皆自在天の作る所であるから罪福は皆自在天の作す所であつて惡道に墮ちることはないと云つて、罪惡を否定するのである。

第六の尼乾陀菩提子外道は現世に苦しんでおけば來世に福徳を得ると云ふのである。

これ等の六師の説は經典の各所に斷片的に説かれてゐるので其の教の内容を詳しく知ることが出来ないが大體の説は以上で知ることが出来るが阿闍世の苦痛はこれ等の説によつて治療することは出来なかつたのである。

其の時現はれたのが先に諫言した耆婆と云ふ大臣である、耆婆は阿闍世王の從兄であるが、其の母が王族でないために臣下となつてゐる。その上古今の名醫として知られてゐる人である。しかも勢力もあつたことは涅槃經に依つても想像せられるのである。

「大王よ御安眠出來ますか」と。

阿闍世は偈を以て答えた

「耆婆私は今重病である、王法を護持し給ふ父王を殺害した。この病氣は如何なる名醫でも咒法でも、巧みな

看病でも治すことは出来ないのである、何故かと云ふと私の父王は正法を護持して法の如くに國を治められた。少しも罪はないのである。それに拘らず私は無道にも逆害を加えた。それは丁度水中の魚を陸に引き上げた様な仕業である。私は昔智者から聞いたが身、口意の三業の清淨でないものは必ず地獄に墮ちると、私は今それである。どうして安眠することが出来ようか、私の病氣は如何なる大醫も名醫も法の藥を説いて治して下さることは出来ないのである」と。

耆婆は答えて

「善いかなく大王は罪をおつくりになつたけれども、今大王の心に非常に後悔と慚愧の心を起して居られる。大王諸佛世尊は常に説き給ふ、二つの善い法があつて能く衆生を救ひ給ふ、一は慚であり二は愧である。慚とは自ら内に省みて恥ぢる心であり、愧と他人に對して恥ずる心である。又慚とは人に恥ぢ、愧とは天に向つて恥ずる心である。これを慚愧と云ふのである。慚愧なきものは人間ではない畜生である。この慚愧が人間にとつて一番大切な事である。慚愧の心があるから能く父母師長を敬い、父母兄弟姉妹がある。善いかな大王は、今この慚愧の心を起して居られます」と。

大王よ今暫くお聞き下さい。

「私佛説を聞くに智者に二つあり、一つには諸惡を作らず、二つには作り終つて懺悔す、愚者にも亦二つあり、一つには罪を作り二つには罪を覆ひかくす、先に惡を作つても後によく慚愧し懺悔して再び作らねば、丁度濁つた水の中へ明珠を置けば珠の威力で水が清くなる様に、亦雲が除かれれば月が明らかになる様に、罪が消滅

して清淨なること本のようにであります、……………臣は一つの善心を修めれば百種の惡を破すと聞いて居ります、大王よ小さい火でもよく一切を焼くように、小善もよく大惡を破ります、小善と云ふけれども、その實は大である、よく大惡を破るからであります……………大王、もし衆生あつて、もろくの罪を作り、覆ふて心に慚愧なく、因果と業報を信ぜず、智慧のある人に聞くことなく、善友に近づかず、この様な人は一切の良醫も治すことは出来ません、加摩羅病（黃病又は黃自病と譯す、癩病の如きもの）には醫者も手をやく様なものである、丁度其の様に大王諸佛世尊の手をやり給ふものに一闍提がある、一闍提とは因果を信ぜず慚愧あることなく、業報を信ぜず、現在及び未來を見ず、善友に親しまず、諸佛所説の教戒に隨はず、この様なものを一闍提と名づけます、諸佛世尊も治し給ふことは出来ません、それは丁度世の死屍を醫師が治すことが出来ない様に、一闍提の者も亦この通りであります、大王、貴方は一闍提ではありません、どうして治すものがないと仰せられるのでありますか、大王よお聞き下さい、今迦毘羅城に淨飯王の子で姓は瞿曇氏、悉達多と名づく方が師を待たずに獨りで正覺を開き無上正眞道を得られました、この方こそ釋尊であります」

耆婆は更に

「大王よ貴方はよく治すものなしと仰せられますが、釋尊は三十二相八十種好を以て自ら莊嚴し、一切を知見し、大慈悲を以て一切を憐愍すること一子羅睺羅の如く、よく衆生に隨ふこと子牛の母を逐ふが如くであります、時を知つて説き、時に非ざれば語らず、實語、淨語、妙語、義語、法語、一語、よく衆生をして煩惱から離れしめ給ふのである、よく衆生の諸根と心性を知り、宜きに隨ふて方便して、衆生を導いて倦み給ふことがあり

ません、其の智の高大なこと須彌山の如く、慈悲の深遠なこと大海の様であります、この佛世尊は金剛の智慧をもつてよく衆生の罪惡を破り給ふのである、出来ないと言ふ事は何ものもないのであります、佛世尊は今此を去ること十二由旬の枸尸城の娑羅雙樹の間に在つて廣く無量阿僧祇の諸菩薩の爲に、種々の妙法を説き給ふのである、或は有、或は無、或は有爲、或は無爲、或は我、或は無我、或は常、或は無常、或は苦、或は樂、或は淨、或は不淨、或は世、或は出世、或は自作自受、或は自作他受、或は無作無受である、大王まさに佛世尊の御許に於て無作無受をお聽き下さい、凡ゆる重罪は消滅するでありませう……」

耆婆は大王よ今暫くお聞き下さいと云つて言葉は續く

「大王、波羅奈城の長者の子に阿逸多と云ふ者がありまして、その母に通じて父を殺して、母が更に外の男と通ずるを見て母を殺し、師の阿羅漢がそれを知つたのを見て、愧ちて師を殺しました、それから祇園精舎へ行つて出家を願うたが、もろくの比丘はこの人が三逆罪を犯したことを知つて許しません、許されぬを怒つて其の夜火を放つて僧坊を焼いて、多くの罪なきものを殺しました、それから後又王舎城に來て如來の御許に行つて出家をお願いすると、如來はこれを許して法を説き給ふたのである、この故に佛世尊を良醫と云ふのであります、六師外道ではないのであります……」

耆婆の言葉は猶つゞくのである、

「大王、北天竺に城あつて細石と云ふ、其の城に龍印と云ふ王がりましたが、國を貪り、父王を殺した人であるが、心に深く悔ひ、國政を捨て、佛の御許に來て出家を求めたのである、佛はその時「善く來た」と云つて

直ちに比丘になし給ふたのである、即ち重罪消滅して大菩提心を起しました、大王、まさに知るべし、佛はこの様な大功徳を有して居られるのです、大王もし私の言葉を信じて下さるならばどうぞ速かに如來の御許に行つて下さい……大王、たとい一月毎に衣食を以て一切衆生を供養し、恭敬すとも、一念佛を念ずる功徳の十六分の一にも及びません、大王たとい黄金を鍛えて人を作り百の車にもろくの寶を積んでこれを布施しても、發心して佛に向い足を舉げて一步するに及びません、たといこの様にして三千大千世界の凡ゆる衆生に供養しても猶發心して佛に向い足を舉げて一步するには及びません、又たといこの様にして恒河沙等の無量の衆生を供養し恭敬すとも一度婆羅雙樹に行つて如來のみもとで法を聽く功徳に及びません」と、その時大王は耆婆に答えて

「……梅檀林は梅檀を以て圍まれてゐる様に如來は清淨にして眷屬も亦清淨である、大龍はもろくの龍を眷屬にしてゐる様に、如來は寂靜にして凡ゆる眷屬も亦寂靜である、如來は貪る心なく、凡ゆる眷屬も亦貪る心がない、佛は煩惱がなく凡ゆる眷屬も亦煩惱がないのである、私は極重の惡人であつて、惡業に縛られ、其の身體臭氣に滿ちて地獄に撃がれてゐるのである、私はどうして如來の御許へ行けませうか、私が如來の御許へ行つてもお言葉を賜る筈がない、耆婆貴方が如何に私を勧めても私は行かない、私は恥づることを知つてゐる」と。

其の時空中より聲が響いて

「無上の佛法まさに衰えんとし、甚深の法河、今に於て涸れんとす、大法燈明滅せんとすること久しからじ、法山くづれんとし、法船沈まんとす、法橋破れ、法殿崩れんとす、大法幢倒れ、法樹折れんとす、善友去ら

んとし、大恐怖の時が来る、法戯の衆生は道に迷い、煩惱の病が世間に満つるであらう、世は闇となり、法に渴く衆生は、法水を求めて泣き叫ぶ時が来た、魔王は喜んで甲冑を解き、佛はまさに大涅槃にかくれんとし給ふ、大王よ佛がもし世を去り給はゞ王の重病を治すものが無い、………大王よ一逆を作ればそれに相應した一罪を受く、二逆罪を作れば即ち二倍になり、五逆を作れば罪も亦五倍になる、大王、そうすると大王の悪業はどうしても逃れることは出来ない、大王どうぞ速かに佛世尊の御許に行きなさい、佛世尊より外に貴方を救ふて下さる方はない、私は今汝を不慙に思うが故、勧め導くのである」と。

阿闍世はこの言葉を聞き終つて非常に怖れを懷き全身は芭蕉の樹の様に戦き慄えて空中を仰いで

「あなたは誰だ」と尋ねると

又空中から聲が響いて

「大王よ我は汝が父頻婆娑羅である、汝は今耆婆の勧めを聞いて佛世尊の御許に行きなさい、邪見な六大臣の言葉に迷はされてはならない」と。

こゝに阿闍世はこの言葉を聞いて悶絶して大地に倒れるのである、すると身體中の瘡が一時に増してその臭いこと先よりも倍する様になつた、これを見た韋提希は靜かに看護するのであるが瘡がますます大きくなつて毒熱臭氣が増すばかりである。

蓋し空中よりの聲が響いて來たと云ふことは父の生前の教が始めて阿闍世に響いたことであり、阿闍世の悶絶したことは阿闍世の自力我慢の立場がなくなつて眞實の教に歸することを顯現してゐるのである。この時佛世尊

は阿闍世の爲に涅槃に入らずとのお心が動くのである。佛世尊の大慈悲心が阿闍世の身心に觸れてゆき、阿闍世の生命にまとひつき、離れずに一つになつて動くのである。阿闍世は單なる阿闍世ではなくて我々一切衆生の代表者である。即ち阿闍世の苦しみは一切衆生の苦しみである。其の苦しむ衆生と佛は一味になつて活躍し給ふのである。即ち阿闍世の爲に佛は月愛三昧に入つて大光明を放ち給ふのである。この光明は清涼で阿闍世を照すと全身の瘡が忽ちにして治り、阿闍世は漸く息を吹きかえして驚いて耆婆に

「耆婆、これは一體どうゆう緣由か、私の瘡は、すつかり治つた、又この不思議な光明はどこから來たのか」と。

耆婆は

「大王よこの光明は貴方の爲に佛世尊が放ち給ふのでありませう、王は先に私の病氣を治す醫者はないと仰せられたから佛世尊は先づこの光明を以て王の身體の病を治し、それから心の病氣の方に向ひ給ふのでありましよう」と。

阿闍世は

「佛世尊はどうして私のことを斯くまで思つて下さるのか、私は佛世尊の教團を迫害し罵つた人間である」と。耆婆はこれに答えて

「譬えば七人の子を持つ親が七人の子供は皆變りなく可愛いゝが、其の中一人の子が病氣になれば親が其の子に心が引かれる様に、佛世尊も亦一切衆生を一子の如く平等に愛し給ふけれども、特に罪の重いものに佛世尊の

心が傾くのである、大王よ、我々が先程見奉つた瑞相は佛が月愛三昧に入つて放ち給ふた光明であります」と。

阿闍世は

「月愛三昧とは何か」

耆婆答えて

「譬えば月の光は、よく凡ての青蓮華を鮮明に花を咲かせる様に、月愛三昧はよく衆生に善心の花を咲かせるのである、それで月愛三昧と云ふのであります、又譬えて云えば月の光は道に迷ふた旅人に喜びを與える様に、月愛三昧も涅槃の道に行く修行者に喜びを與え給ふのであります、それ故月愛三昧と云ふのであります、又この三昧は凡ゆる善の中の王であります」

阿闍世は

「耆婆、私は聞いてゐる、如來は惡人と共に行住座臥し、言語談論し給ふことはないと聞いてゐる、私の様な極惡の者は如來に近づくことは出來ないのだ」と。

耆婆は

「大王、渴くものは泉を求め、餓えたものは食を求め、病者は醫を求め、怖れるものは救いを求め、熱者は涼を求め、寒者は衣を求める様に、大王も今佛を求めなければなりません、大王よ、佛は一闍提の爲に法を説き給ふのである、況んや大王は一闍提ではない、何故佛の救濟を蒙ることが出來ぬでありますか。」

阿闍世は

「耆婆、私はかつて聞いたことがある、一闍提とは、信ぜず、聞かず、觀察すること能はず、義理を得ずと、何が故にこうゆう者の爲に法を説き給ふのであるか」

耆婆答えて

「大王よ佛は一闍提の輩に於てよく根性を知り、そうして彼等の爲に法を説き給ふのである、佛はもろくの病氣を見て法藥を常に施し給ふのである、法藥を飲まないのは病人の罪であつて佛の罪ではないのである、大王よ……諸例如來はもろくの衆生が三惡道へ墮ちるのを見て凡ゆる方便をめぐらして救濟し給ふたのであります、この故に如來は一闍提の爲に法を説き給ふのであります、況んや大王は一闍提ではありません、何が故に如來の救濟を受けることが出来ぬでありますか」

耆婆大臣は阿闍世を一闍提ではないと云つてゐるが而し耆婆は確かに阿闍世の上に一闍提の少くとも影を見てゐるのである、そうでなければ「大王よ今一闍提に非ず」等と云い出すことはないと思ふ、阿闍世が父王を殺し終つて心悔熱を生じた時に、彼は三千大千世界の何ものも絶體に自分を救ふものはないと云ふことを知つたと思ふ、何ものにも絶體に救はれない阿闍世こそ一闍提でなければならぬ、一闍提を客觀的世界に見るのではなくて自己の中に見なければならぬのである、(その時にこそ阿闍世は一闍提である、)一闍提とは在るべきものではなくして見るべきものである、もし客觀世界に一闍提ありとするならば、一切の衆生は凡て一闍提であろう、而し自己の内に見ることが出来なければ彼等は一闍提ではないのである、一闍提は自己の内に見る所にあるのである、深くく内を見る時、心の奥底の中に一闍提は立つてゐるのである、親鸞聖人は自己の上に極惡底下の泥

凡夫を見られたのである。

耆婆はあくまでも阿闍世を一闍提ではないと云つてゐるが、而らば一闍提はどこにゐるのか、耆婆は言葉の上で阿闍世を一闍提ではないと云つてゐるのは臣として王を一闍提と思いたくないのであると思ふ、而し阿闍世自身は自己の内に一闍提を感じてゐるのである、一闍提を自己の内に感ずる所に宗教があるのである。

親鸞聖人は大無量壽經の第十八願に着眼されたのは「唯除三五逆誹謗正法」である、五逆罪と正法を誹謗するものこそまさしく一闍提でなければならぬ、而し五逆罪と正法を誹謗するものが眞實に除かれるならば十方衆生と云ふ如來の呼聲は無効になることになる、而して十方衆生の文字は空言にならざるを得ないのである、そこに親鸞の深い内省内觀の世界があつたのである、十方衆生とは何であるか、それは親鸞であり、除かれてゐる五逆罪と誹謗正法の人も亦親鸞であると内觀されたのである、無量永劫生死の罪を背に負ふてゐるのである、即ち十方衆生とは一闍提であり、十方衆生の内觀の世界に立つてゐるものである、客觀世界に於て一闍提はあり得べからざるものである、もし五逆罪と正法を誹謗するものが救濟より、もれるならば慈悲の父母（釋尊、彌陀一尊）は慈悲の父母として存在價值がなくなるであらう、五逆罪なればこそ、誹謗正法なればこそ如來の大慈悲心がいよ／＼強く動くのである、こゝを親鸞聖人は

自著の尊號眞像銘文に（本三丁）

「唯除五逆誹謗正法といふは、唯除とはたゞのぞくといふことばなり、五逆のつみびとをきらひ、誹法のおもきとがをしらせんとなり、このふたつのつみのおもきことをしらしめて十方一切の衆生みなもれず往生すべしと

しらせんとなり」と、

仰せられてゐるのである、除くと云ふ言葉は如來の救濟からもれると云ふことではなくて、我々をして五逆罪と謗法の罪の重きことを知らせんが爲である、端的に云えば我々は間違ひなく五逆の罪人であり、謗法の惡人であることを知らせんが爲である、この二つの罪の重きことを示して下さると云ふことは我々が如何に救はれ難い凡夫であるかを知らせんが爲である、この沈痛な深刻な自覺を促して十方衆生皆もれることなく如來の大慈悲心で救はれることを教示されたのである、親鸞聖人が主著教行信證の中にこの阿闍世王のことを殆んど引用してゐることで如何に涅槃經の梵行品を重要視せられたか解るのである。

扱ていよく阿闍世は

「耆婆よ、もし佛はこの様な方ならば私は明日吉日良辰を選んで佛のみもとに往ぐであらう」と。

耆婆は

「如來の法の中に吉日良辰を選ぶと云ふ事はありません、大王、重病人は吉日良辰を選ばないで唯良き醫者を求める様に大王は今病重く佛の良醫を求めてゐるのであるから、吉日良辰を選ぶことは有りませぬ、梅檀の林も伊蘭の林も焼ける相には變りありませぬ、吉日良辰もその通りであります佛の御許に行けば罪障を滅することが出来るのであつて、それが吉日である、どうぞ大王、今日速かに行つて下さい」と。

此々に於て阿闍世王の心は決定したのである、直ちに吉祥と云ふ大臣を呼び

「大臣、私は今日佛世尊の所に行こうと思ふ速かに供養の具を調べてくれ」と。

吉祥大臣喜んで

「善いかな大王よ供養の諸具は悉く一切調ふて居ります」と。

阿闍世王はその夫人等、輦乗一萬二千、巨力の大象五萬、一々の象の上に各、三人のものが幡蓋を捧げてゐる、華香、伎樂、種々の供養は皆調べ、騎馬に従うもの十八萬、摩伽陀の人民の従うもの五十八萬である、拘尸城に集つてゐる大衆は皆阿闍世王と其の眷屬が莊嚴な行列をつくつて遙かに路を尋ねて近づき來たるを見るのである。

其の時佛世尊は大衆に告げて申されるには

「凡ての衆生が悟りを得る一番近い因縁は善き友、即ち善知識である、何故かと云えば阿闍世王が耆婆の勸めを聞かなかつたならば王は來月七日命を終つて無間地獄に墮ちてゐる所である、それであるから善知識は大切なことである」と。

阿闍世王は佛世尊の御許へ參上する途中で舍衛城の毗流離王が舟に乗つて海で舟火事の爲死んだと云ふこと、畢伽離比丘が生きながら阿鼻地獄に墮ちたこと、須那殺多は色々の惡事をなしたが佛の御許へ行つて凡ての罪が消えたこと、を聞いて、

耆婆に云ふには

「私は今この事件を聞くけれども、猶迷ふてゐる耆婆よ、私は汝と一緒に象に乗ろうと思ふ、そうすればたとい私が阿鼻地獄へ墮ちようとしても汝が押えて落さぬであろう、何故ならば私はかつて道を得た聖者は地獄

に墮ちないと聞いてゐる。」と。

其の時佛世尊はもうくの大衆に告げて

「阿闍世王は猶疑心を持つてゐる、私は王に決定心を得しめるであらう」と。

其の時大衆の中に持一切菩薩と云ふ菩薩が佛世尊に申し上げて、

「佛世尊、佛がかつて説き給ふた様に、一切諸法には定相がない、一切の物にも定まつた相なく、涅槃にも定まつた相はありません、而るに如係は今何故に阿闍世の爲に決定心をなすと仰せられるのでありますか」と。

佛世尊は

「善いかな善男子、諸法に定相がないから王の疑心を破ることが出来るのである、もし王の心が決定して動かぬものならば、王の逆罪をどうして破ることが出来るか、王の心に定相がないからその罪を破ることが出来るのである、王の心に定相のないことを知らしめるために決定心を得させねばならないのである。」と。

其の時阿闍世王は娑羅雙樹の間を行つて佛の御許に至り仰いで如來の三十二相、八十種好の微妙眞金の山の様なお姿を見奉るのである、時に佛世尊は温かい、やさしい聲で

「大王よ」と。

阿闍世は左右を顧みて心に思ふにはこの大衆の中に大王とは誰であろう、私は既に逆罪を犯して福德がないから如來は私を大王と呼び給ふ筈がないと。

其の時佛世尊は再び

「阿闍世大王」と申された。

これを聞いて阿闍世の心は歡喜して、如來は今日私を顧みて温かいお言葉を賜る、如來は一切の衆生を大悲憐憫して差別がないことを知るのである。

則ち佛に

「世尊、我今疑の心が永くなくなりました、如來は誠にこれ衆生の無上大師であることも知りました」と。
其の時弟子の迦葉菩薩は持一切菩薩に

「如來は既に阿闍世王のために決定心をなし給ふ。」と。

この一節は誠に微妙である、諸法に定相がないから五逆罪も一闍提をも破ることが出来るのである、定相あつて動かぬものならば五逆罪は永久に五逆罪であつて、一闍提は永遠に一闍提でなければならない、佛は阿闍世の心が鐵の如く地獄に繋がれてゐるのを破り給ふたのである、この場合これより外に阿闍世を無碍自在の世界に出す方法はなかつたのである。

阿闍世王は又佛世尊に

「世尊たとい我今梵王、帝釋と同座して飲食をしても悦びと思ひませぬ、如來の温かい御一言を頂いて私の心は大きい喜びに満ち／＼て居ります。」と云つて

幡蓋、香萃、伎樂を供養して前へ進んで佛足を禮し奉りて右に三回廻つて禮し終つて一面に座つた。
其の時佛世尊は、

「大王、今まさに汝が爲に正法の要を説くであろう、心を一にして明らかに聽きなさい、凡夫は常に心にかけて次の事（二十事）を觀ぜずべし、一にはこの身、空であつて有漏である、二にはもろくの善根がない、三には生死の世界は未だ調順を得じ、四には深坑に落ちて畏れない所はない、五には何の方便を以て佛性を見ることが出来るであろう、六にはどうして定を修めて佛性を見ることが出来るであろう、七には生死の世界は常に苦であつて常樂我淨なし、八には八難の難を遠ざけることは得難い、九には怨の家からは追はる、十には一法でさえよく持することがない、十一には三惡趣に於て解脱を得じ、十二には色々の惡、邪見を持つてゐる、十三には亦未だ五逆をのがれることを知らない、十四には生死は際なく、其の邊を得ることが出来ない、十五には諸善を作らねばその果報を得ち、十六には我作つて他人が果を受くることはない、十七には樂因を作らざれば樂果なし、十八にはもし業を造るならば果は遂に失はじ、十九には無明によつて生じ、無明によつて死す、二十には過去も未來も現在も常に放逸を行じてゐる、大王よ、凡夫の人はまさに常にこの觀をなすべきである、この觀をなすならば生死の世界を願はず、生死を願はねば心が澄んでくる、心が鎮まり、心に智慧が現はれ、戒を持つて惡を作らねば死の畏れ、三惡道の畏れはないのである、もし心にかけてこの事を觀察せざるものは心は常に放逸であつて、惡として作らぬものはないであろう、」と

阿闍世は

「世尊、私は昔からこれらの事を觀察せずして多くの惡を作る、多くの惡を作るが故に死を畏れ三惡道を畏れず、世尊、私は自ら我が禍を招き重惡を作りました、罪なき父王をほし、逆害を加えました、この二十

事を観じても観じなくても私は必ず阿鼻地獄に墮ちます。」と。

佛世尊は大王に

「一切の諸法には定相がなく、決定と云ふことはない、王は何故必定して阿鼻地獄へ墮ちると云はれるのか」と。

阿闍世は佛に申して

「世尊もし一切の法に定まつた相なければ、我が殺害も亦定相がないことになります。もし殺に實相があるならば一切の諸法に定相なしとは云はれませぬ。」と。

佛は

「大王善いかな諸佛世尊は一切の法悉く定相なしと説き給ふ、王は今よく殺害に定相なきを知る、定相なきものは不定である、故に殺害は不定である、殺害は不定なるが故にその報いも亦不定である、どうして必定して地獄に墮ちると云はれよう、大王、一切衆生の作る罪業に二種あり、一つは輕、二つは重罪である、もし意と口の罪は輕しとなし、身口意(三業)の罪は重いと云ふべきである、大王意に念ひ口に説いて身に行はないものはその罪の報いも輕いのである、大王は昔國に父王を殺せと云はない、たゞ足を切れと命じたのである、大王がもし侍臣に立つ時は王の首を斷せよと勅せられたとすれば、父王が座つて居られる時に首を斬るならば、罪は侍臣にあつて王にはないと云はねばならない、況んや王は首を斷せよと勅せず、どうして罪を得ると云はれよう、王もし罪を得るならば諸佛世尊も亦罪を得るであろう………」と。

この世尊の説法は阿闍世の逆惡を甘やかすものではなくて阿闍世の心が鐵の如く堅く繋がれてゐるのを解くためである。而しもし阿闍世父王を殺害しながら心に怖れなく慚愧なく、地獄に墮ちる自覺なきものならば世尊は鋭い而かも嚴やかな言葉と方便を以て阿闍世の殺害を責めて居られたことだらうと思ふのである。

世尊のお言葉は續くのである、

「それは何故であるかと云ふと汝が父先王頻婆娑羅はかつて諸佛の御許に於てもろくの善根を植えられたのである。この故にこの世で王位につくことが出来たのである。もし諸佛世尊が父王の供養を受けられなかつたらば王となることはないのである、もし王とならば汝は國位を貪つて父王を殺害する筈ではなかつたのである、汝もし父を殺して罪あるならば我等諸佛も亦罪あるべし、もし諸佛世尊罪なければ汝獨り罪ありと云ふことは出來ないのである。

大王、昔頻婆娑羅は狂惡の心をもつて毘富羅山に獵りに行き野をさまよひ歩いたが、一つも得ることがなかつた。唯一人の仙人を見出して大いに怒り、一頭も獲物がいないのはこの仙人が獲物を逐ひやつたからであると考えた。唯一人の侍臣に命じて仙人を殺さしめたのである。仙人は臨終に瞋恚の心を起して神通力を失ひ誓を立て、云ふには私には罪はないのだ、汝が心と口によつて私を殺させるのだ、我れ來世に於ても亦心口を以て汝が命を害するであろうと、時に頻婆娑羅王はこの咀の言葉を聞いて後悔して仙人の屍骸を供養したのである、先王は斯くの如く軽い果報を受けて地獄に墮ちず、況んや大王は地獄の果報を受けられる筈がない、先王は自ら罪を作して自ら報いを受けられたのである、どうして大王が殺害したと云はれよう、大王は父王に罪なしと云はれるがどう

して罪が無いと云ふことが出来よう。それ罪あるものは罪報がある、悪業無きものは罪報はない、汝が父先王もし罪がなければどうして報いを受けたのか、頻婆娑羅は現世に於て善果及び悪果を受けられた、この故に先王も亦定相なく不定である、不定であるから殺害も亦不定である、殺害に定相なければどうして定んで地獄に墮ちると云はれるのか………」と。

佛世尊の説法は漸層的にすゝんでゆくのである。

「大王、王は宮中に於て常に羊を屠ることを勅して心に少しも懼れてゐない様である。而かも父王崩御について懼れて居られる、もとより人間と獸との尊卑の差別はあるけれども、命を保ち死を畏れることには二つとも異なることはないのである、何が故に羊に於ては心軽くして懼れなく、父先王に對してのみ重い苦しみを起されるのか、大王世間の人は愛（煩惱）のしもべであつて心に自在を得て居らない、愛に使はれて殺害を行ふのである、たとい果報があつてもそれは愛の罪である、王の心は自在を得て居らない。自在の無い所には罪は無いのである。大王涅槃は有に非ず無に非ず、而かも有である様に殺害も亦この通りである、慙愧の人は有ではない、有でないから果報がないのである。無慙愧の人は無ではないから果報があるのである、大王の心は今深く慙愧に満ちてゐる。どうして必定して地獄に墮ちると云はれようか。

大王色（人間の身體は色、受、想、行、識の五蘊が假りに和合して成立してゐる、色は物質、受は感覺、想は感覺によつて生ずる苦樂好惡の思ひ、行は苦樂の想によつて行動となる、識は行動によつて識別する）は無常であつて色の因縁も亦無常である無常の因より生ずる色はどうして常であろうか、乃至識は無常であつて識の因

縁も亦無常である、無常の因より生ずる識がどうして常であろうか、無常の故に苦しみ、苦しみの故に空であり空の故に無我である、もし無常、苦、空、無我ならば何を殺害するのか、無常を殺さば常涅槃を得るであろう、苦を殺害せば樂を得、空を殺さば實を得、無我を殺さば則ち我と同じである、我れも亦この無常、苦、空、無我を殺してゐるが地獄に墮ちず、汝はどうして地獄に墮ちると云はれようか、」と。

この長い説法はこゝに至つて初めて佛法の眞髓を顯現して來たのである。

その時阿闍世は佛の説き給ふ如く色を觀じ乃至識を觀じたのである、この觀を爲し終つて、佛に申すに

「世尊私は今始めて色はこれ無常乃至識もこれ無常であると知りました。私はもとこの様に能く觀じて居れば則ち罪を作らない、世尊私は昔諸佛世尊は常に衆生の爲に父母となると云ふことを聞きました、が今始めてこの言葉の眞實を知りました、世尊私は又昔須彌山は金、銀、瑠璃、頗梨の四寶によつて出來てゐて、もろくの鳥が集つて來た所の色となると聞きましたがこの意味が解りませんでした、が今佛の須彌山に來て同じ色となりました、色を同じゆうするとは則ち諸法の無常、苦、空、無我を知ることでありました。世尊私は世間に伊蘭子より伊蘭樹を生ずるのを見、伊蘭の梅檀の生ずるのを見たことはありません。而るに私は今始めて伊蘭の種から梅檀の樹の生じたのを見ました、伊蘭子とは私のことであり梅檀樹とは私の心に生えた根の無い信であります。無根とは私は今まで如來を恭敬することを知らず、法も僧も信じたこともない者であります。これを無根と名づけるのであります。世尊もし私が如來世尊に遇い奉らなかつたならば無量永劫の間大地獄に墮ちて無量の苦しみを受

けねばならぬのでありました、私は今何の幸ぞ、如來を見奉ることを得ました、この見佛の功德を以て悉く衆生の煩惱を破ることが出来ます。」と、佛のたまふ

「大王よ善いかな〜私は今汝が必ず衆生の惡心を破るであろうことを信ずる。」
阿闍世は

「もし私がよく衆生の惡心を破ることが出来るならば、無量劫の間阿鼻地獄に墮ちて衆生の爲に大苦惱を受けても苦しみとは思いません。」と、

その時摩伽陀國の無量の人民が一時に大菩提心を起したのである、これ等の無量の人民が大菩提心を起した爲に阿闍世王の凡ての重罪は大いに薄らぐことが出来て阿闍世王を初めとして夫人、後宮、採女達も皆同じく大菩提心を起したのである。

この時阿闍世は耆婆に

「耆婆、私は未だ死せずして已に天身を得、短命を捨て、長命を得、無常身を捨て、常身を得、もろ〜の衆生に菩提心を起さしむ、即ちこれ天身、長命、常身、一切諸佛の弟子である。」と

云い終つて種々の寶幢、幡蓋、香華、瓔珞、微妙の伎樂を以て佛に供養して、偈を以て讚歎し奉るのである。

「如來のお言葉は微妙にして巧みである、如來のお言葉は甚深にして秘密の意味が包まれ、衆生の爲に、時には廣く時には略して説き給ふ。

如來はこの様ないろ／＼なお言葉を以て衆生の病を治し給ふ。

もろ／＼の衆生このお言葉を聞くものは信じ、信ぜない者も遂に疑晴れてまことの佛説を信ずる様になる。

如來は常にやはらかい語を以て法を説き給ふが、時には龕曇な語を用い給ふこともあるけれども龕曇、軟言は第一義諦に歸す、この故に私は世尊に歸依し奉るのである、如來のお言葉はいつも變りなく一味であつて大海水の如く常住同味である。

これを第一義諦と名づけ、如來には意味のないお言葉と云ふものはないのである、如來は今説き給ふ所の種々の無量の法は男女老少の人々をして同様に第一義の涅槃を證らしめんためである。

この第一義の涅槃と云ふのは因もなく果もなく、又生もなく、滅もないもので、これを大涅槃と名づけるものである、この説法を聞く人々は皆惱を徐き去ることを得るのである。

如來は一切の爲に常に慈父母と作り給ふ、如來は大慈悲心を以て衆生の爲に苦行をつとめ給ひ、丁度魔物につかれて狂心して種々雑多のことをする人の様に在します。

私は今佛を見奉ることが出來て身口意の三業の功德を得たのである、この功德を菩提の道に廻向したい。

私が今供養する佛法僧の三寶の功德を世の爲に永く光となつて頂きたい。

私が今得た所のもろ／＼の功德で一切衆生の修道上の魔を退治したい。

私はかつて悪友に遇つて過去、未來、現在、三世の罪を作つた。

今私は佛前で懺悔す、願はくば後佛力によつて再び惡を作らない様にしたい。

願はくばもろくの衆生悉く菩提心を起し一心に十方の一切諸佛を念じ奉り、又永くもろくの煩惱を斷ち切つて明らかに佛性を見ること文殊菩薩の様にならんことを念じます。」と

その時世尊は阿闍世王を讚歎して

「善いかなくもし人よく菩提心を起すならば、この人は即ち諸佛の大乗を莊嚴するものである、大王今より後常に菩提の心を修めなさい、この因縁によつてまさに無量の惡を消滅することが出来るからである、」と

其の時阿闍王及び摩伽陀國の一切の人民は座より立つて佛の周圍を三回廻つて辭退して王舍城に還えつて行くのである。

これを以て阿闍世王に關する説法は終つてゐるのである。

二

最後に親鸞聖人はこの涅槃經に現はれた阿闍王を如何に觀察して居られるかを考察しようと思う。親鸞は其の主著教行信證の信の卷に涅槃經を引いて居ることで如何に重要視せられてゐるかと云ふことが解るのである。親鸞は單に經文を解釋せんが爲に引かれたのではなくして、この阿闍世王の逆罪の上に自己の真相を發見し、自己の逆罪を感じ、廣く悲慘な人生そのものを實驗せられたのである。即ち親鸞は自己の人生經驗と信仰體驗をこの經文を通して表象せられてゐるのである、如來の救濟がこの實人生の上に活躍するものでなければならぬ。

韋提希夫人は徹底的に壓迫されて動きの取れない最後に追いやられて始めて救はれたのであるが、阿闍世王は

徹底的に壓迫しきつて最後に自己の立場を失なつて宗教に入らなければならなかつたのである。親鸞は一面草提希夫人と等しい人生經驗を感ずると共に又自己に逆惡を感ぜられる時は阿闍世王に思いを等しくしたのである。草提希夫人は冷酷な仕業の下に自己の弱小さに泣き、阿闍世はその驕傲と逆惡の自性によりて犯した罪の恐しさに泣いたのである。共に人生の悲惨であり人間の本性の暴露である。如來の救濟はこの上に強く働くのである。阿闍世の方は罪惡を犯した場合であるから罪惡に對する痛切な說法、痛切なる自覺、深い歡喜等極めて明らかに且有効に説示されてゐるのである。これ實に生ける如來の大慈悲である。五逆罪を犯し、正法を誹謗した阿闍世は大地に倒れて苦しんでゐる。その苦しみを御自身の苦しみとして共に苦しむと云ふ親心から「爲阿闍世王不入涅槃」と、即ち阿闍世の爲に涅槃に入らずとの心が動くのがある。これを深く味得すれば阿闍世は一阿闍世ではなくて一切の五逆罪を作る者、正法を誹謗する者である即ち一切衆生でなければならぬ。この一切衆生の爲に涅槃に入らずとは大無量壽經の第十八願の「若不生者不取正覺」の大慈悲心である。この大慈悲に攝取せられた時阿闍世王は心の内に無限の喜びを感じ無量の生命を感じたのである。これ伊蘭の心より梅檀の信が芽えたのである。この無限の生命に蘇つた阿闍世は限りなき希望を感じて「我れ審らかに能く衆生のものもくくの惡心を破壊せば我常に阿鼻地獄に在りて無量劫の間もくくの衆生の爲に苦惱を受けても苦しみとせじ」と叫んだのである。これはそのまゝ「我行精進、忍終不悔」のの偉大な佛心である、親鸞は阿闍世を自己一人を導かんが爲に顯現された菩薩として味得されたのである。阿闍世は單なる阿闍世ではなく一切衆生の代表者である。そうして如何なる逆惡なる者でも救はれてゆくこと説示されたのである。即ち一切衆生の生命の上に久遠の佛のまことが我々

の生命と一つになつて動いて下さることを顯はしてゐるのである、換言せば如何なる罪惡にも業報にも妨げられない佛の大慈悲心の顯現である。

これを親鸞聖人は高僧和讃（曇鸞章）に

「罪障功德ノ體トナル

コホリトミヅノゴトクニテ

コホリオホキニミヅオホシ

サハリオホキニ徳オホシ」

と。

又歎異鈔第一節に

「本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆえに、惡をも恐るべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆえにと」

同じく第七節に

「念佛者は無碍の一道なり、そのいはれいかんとなれば信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪惡も業報も感ずること能はず、諸善もおよぶことなきゆえに無碍の一道なり」と。

又行信證（信卷本三十丁右）に

「おほよそ大心海を信ずれば乃至造罪の多少をとはず、修行の久近を論ぜず行にあらず、善にあらず、乃至唯これ不可思議、不可稱、不可説の信樂なりたとへば阿伽陀藥のよく一切の毒を滅するが如し、如來誓願の藥はよく智愚の毒を滅するなり」と

これ等の文の具體的な表現がこの阿闍世王の入信である。誠に無限大悲の佛は一切の責任を引きうけて一切衆生を救済し給ふのである。

参考文献

教行信証

高僧和讃

歎異抄

同訳大藏経「涅槃経第一」

藤氏「涅槃経」

山辺氏「教行信証講義」

拙著「韋提希夫人について」

大無量壽経

以上

(本學助教授・宗教學)